

國學院大學学術情報リポジトリ

取り組みレポート-大学生の日本語表現技術における
ループリックの活用：
詳細な項目のループリック使用の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 春日, 美穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002078

大学生の日本語表現技術におけるルーブリックの活用 —詳細な項目のルーブリック使用の可能性—

Rubrics with Specific Criteria : Improving Japanese Expressions Skills of University Students through the Application of Rubrics

春日 美穂

【要 旨】

本稿は、大学生のリメディアル教育、初年次教育としての日本語表現技術の授業での、ルーブリックの活用について記したものである。ルーブリックは、学生同士のピア添削や、複数の教員間での評価基準を統一する際に効果的である。本稿では、大正大学の日本語表現技術の授業に際し、詳細な項目を持つルーブリックを使用したことを契機とし、詳細な項目を持つルーブリック使用のメリットやデメリット、その可能性について報告を行う。具体的には、メリットとして授業運営と関連させられること、小論文を点数化できるので課題を浮彫にできることなどがあり、デメリットとしては、添削者の負担が大きいことなどがあげられる。可能性としては、大学院でのピアワークでの使用があり、大学院生の日本語表現技術を鍛えることで、大学院生をTAとした日本語表現技術に関するライティングセンターにもつながることを報告した。

【キーワード】

リメディアル教育 初年次教育 日本語表現技術 ルーブリック ライティングセンター

【Abstract】

This paper examines the use of rubrics in lectures of Japanese language expression technique, as part of the remedial education as well as first year education for university students. Using rubrics is effective with peer corrections between students and the unification of evaluation standards between several members of teaching staff. This paper reports the advantages, disadvantages, and the possibilities of using rubrics containing specific criteria. Taisho University applied rubrics with specific criteria in their lectures of Japanese language expression technique, and this was used as an opportunity for gathering necessary information for the report. The advantages of using rubrics for teachers were that they were able to relate rubrics with class operation and made it possible to evaluate student essays by scoring them numerically. As a results, hidden problems were revealed. The disadvantage was the increase of workload on the corrector. Regarding its possibility, the technique was used in a peer work at the graduate school to train postgraduate students. From this result it was reported that this would also relate with the Writing Center regarding Japanese language expression technique with graduate school students as teaching assistants.

【Keywords】

rubric; Japanese expression; Japanese language skill; first year; specific criteria

はじめに

現在の大学教育において、リメディアル教育、初年次教育は、多くの大学が共有する課題である。その中でも大学生の日本語表現技術に関する課題を持つ大学は多い。大学で教鞭をとる際、書き始めの1マスがあいていない・常体と敬体が混在する等の特徴をもつ学生の文章を、多くの教員が、少なくない量で目にしているのではないかな。

筆者が勤務する大正大学では、2014年度入学生から、「学びの基礎技法B」という科目名のもと、全入学者（2014年4月段階で1185名）を対象に、2年間の必修授業として、日本語表現技術の授業が開始された⁽¹⁾。授業が開始してから半期が過ぎ、方法や方向性は手探りの部分もあるが、リメディアル教育的な内容も補完しつつ、専門教育につなげられるような、アカデミックスキルズを身に着けることを目標に、授業を進行させているところである。

「学びの基礎技法B」の特徴的な部分は以下の点である。

- ① 1・2年生全員に、基本的に2年間必修としている。
- ② プレイメントテストを行い、学科やコース内でレベル別クラス編成を行っている。
- ③ 半期でレベル別クラスの入替えを行う。
- ④ 学年で成績を統一的につける。
- ⑤ TAを各クラスにつける。

以上の点は、今後変更していく可能性があるが、平成26年度前半はこのように授業運営を行った。

授業運営の方法としては、前期の授業では、学生に4回小論文を書かせ、ループリックを使用しながらその小論文を詳細に添削していくことで、学生の課題を浮彫にし、その内容を授業に反映するという方法をとった。

以下この授業をもとに、日本語表現技術の授業におけるループリックの活用法について述べていきたい。

1. 日本語表現技術の指導におけるループリックのあり方

昨今の大学教育で、導入されるようになったもののひとつとしてループリックがある⁽²⁾。ループリックとは、「ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもの⁽³⁾」である。

沖裕貴氏は、大学におけるループリック評価導入について整理している。その中で、「科目が複数の教員の担当する科目として開講されている場合、各自の授業概要と到達目標、そして成績評価基準を標準化するための手続きとしての役割を果たす⁽⁴⁾」と述べている。

大正大学の「学びの基礎技法B」に関しても、2014年度新入学生を5人の教員で担当し、統一的な基準により成績をつける必要があったため、ループリックを成績評価に導入するに至った。具体的には、学生の小論文を点数化する際の使用である。

「学びの基礎技法B」の担当教員によりループリックの作成作業が行われ⁽⁵⁾、大学での

教育をほぼ受けていない4月の段階の学生の小論文の評価を試みた。しかし、項目をしぼったルーブリックにより小論文評価を行おうとしたところ、学生の課題を拾いきることができず、ひとつの項目が多岐にわたる課題を吸収する形となり、学生の問題点を明らかにすることができないという結論に至った。また、「学びの基礎技法B」は、大正大学の大学院生を中心とするTAが各クラスに配属されており、TAも学生の文章添削に参加することで、学生の日本語表現技術を伸ばすとともに、TA自身の日本語表現技術を進展させることも期待されている。そのため、項目をしぼったルーブリックで、実際にTAにも学生の文章を添削してもらったところ、学生の文章の問題点と、ルーブリックの項目を一致させることができず、使用できないという状況が認められた。

以上のことにより、28項目350点満点にわたる詳細な項目をもつルーブリック（学生との共通の名称はチェックシートとした。資料1参照）を導入することとなった。

2. 日本語表現技術の授業での詳細なルーブリック使用のメリットとデメリット

以下の表は、大学での教育をほぼ受けていない状態の4月に書いた小論文⁽⁶⁾と、前期の最後に書いた小論文とを、詳細なルーブリックを使用して添削・点数化(350点満点)を行った成績を比較したものである。筆者が担当している6クラスそれぞれの平均点を順不同に並べた。

	A	B	C	D	E	F
第1回小論文	182	195	188	194	198	204
第4回小論文	230	232	242	225	212	222

詳細なルーブリックを使用する最大のメリットとしては、上記のように、小論文が点数として可視化できるという点である。この表を見ると、おおむね半期の授業を経て学生の小論文の点数が伸びていることがわかる一方、伸びにかなり差があることもわかり、こうした差異の原因についても、今後細かく分析していく予定である。

詳細なルーブリック使用には今述べたことのほかに、以下のようなメリットがあった。

- ① ルーブリックの説明が、日本語表現技術の説明と連動しているため、授業と有機的に結びつく。
- ② 学生に説明する際、問題点を統一の評価項目として共有することができるため、学生も自分の文章の問題点を具体的に把握し、直すことができる。
- ③ 小論文という、添削者の主観によってとらえ方や評価が左右されるものを採点する際、添削者による誤差を最小限にできる。
- ④ TAとの協働作業において、評価項目を共有することができる。
- ⑤ 学生の手紙用紙には、基本的には番号を書き込むだけなので、コメントを書く労力

が省け、学生も見やすい⁽⁷⁾。

一方で以下のようなデメリットもあった。

- ① 学生によってはすべての項目の理解が難しい。
- ② 添削者によって使用する番号（問題とするポイント）が異なる場合がある。
- ③ 添削に時間がかかり、添削者の負担が大きい。

文章指導において、添削をどうするかということは、授業担当者が直面する大きな課題である。教員の気持ちとしては、学生が何を書いているのかを自身で読み、添削したいという思いが、まず素直にわき起こる気持ちであるといえよう。しかし、添削には多くの時間がかかるのも事実である。筆者は春学期約240名の学生を担当しており、4回の小論文を課した。1回目の小論文は、常体と敬体が混在し、段落がひとつもないものも大変多く、ループリックを使用し、コメントをほとんど書かなかったにもかかわらず、1枚あたりのチェックに15分以上かかる場合も多かった。4回目の小論文はチェック箇所が激減し、添削の時間もかなり軽減されたが、それでも1枚あたり5分程度はかかったため、平成26年度の前期は、大学でも自宅でも添削をし続けた日々であった。添削により学生の文章がよくなったという手応えはかなりあったが、永続的に続けられるものでもないという思いもあった。添削をしたいという気持ちと、それに伴う質的な負担は、文章指導を担当する教員が多く直面する問題であるといえよう。

近年の大学教育の中ではピアワーク⁽⁸⁾による学生相互の取り組みが行われており、教員が添削を行わない、あるいは最低限の添削しか行わないという方法も多くとられている。ピアワークのほうが学生自身も気づきが多いという面もあるだろう。筆者の授業においてもピアワークを取り入れている（資料2）。一方で、ピアワークをするには、一定程度の知識やレベルがなければ、何をどのように見ればわからないという場合も多くあると考えられる。実際学生のピアワークに関する感想の中には、自分の文章を書くこともままならないのに、人の文章を評価しろと言われて大変困惑したという感想もあった。また、学生同士がつけあったループリックを回収して、実際に学生が書いた文章と照らし合わせてみると、問題点をループリックに反映させられていないものも多くあった。

以上のことを考えると、学生の日本語表現技術をピアワークができる域にまで引き上げるために、ある程度詳細な項目を持つループリックで評価基準を共有しながら添削指導を行い、学生の基本的な文章力を伸ばしておく必要がある。実際、添削指導を行ったあとの学期である後期には、詳細なループリックの項目をしばらくこんだループリック（資料3）を学生自身が使用できるまでに到達した⁽⁹⁾。ただし、詳細な項目での添削は、教員にとっては負担を感じるものでもあるため、授業の規模、人数、進行状況によって、詳細なループリックを使つての添削、簡易的なループリックを使つての学生によるピア添削などを効

果的に組み込んでいくことで、学生の日本語表現技術向上が見込めるといえよう。

3. 詳細な項目をもつループリック使用の可能性—大学院での指導からライティングセンターへ—

詳細なループリックと、項目をしぼったループリックの双方を使用して得た実感として、詳細な項目をもつループリックを大学院のゼミで使用することを提案したい。大学院生になってまで日本語表現技術のトレーニングが必要なのかという疑問もあるかもしれないが、修士課程の院生でも、基本的な文章の書き方に問題を抱える院生は多いと推測される。大学院生には、学部生の卒業論文よりもさらに質の高い論文の執筆が必要となるため、修士課程の早い段階で徹底的にトレーニングを行うことは、今後の研究生活に大きく寄与する。また、修士課程を出て専修免許を取得し、教員となる院生も多い。そうした場合、詳細なループリックを使い、自身の書く文章だけではなく、ピアワークをとおして細かなところまで技術的に文章を読める力をつけておくことは、教員になった際大きく効果をあげることとなるはずだ。修士課程では、教員が添削するのではなく、詳細なループリックを用いてレポートのピア添削を繰り返すことで、ゼミ全体の文章技術向上へとつなげることも可能であろう。院生の文章表現技術を高めることは、その院生をTAとして学部生の指導に関わらせることにもつながっていく。

昨今、大学院生をTAとしたライティングセンターを開設している大学がでてきている⁽¹⁰⁾。学部生のレポートや卒業論文を、教員が携わる前に院生が指導することで、院生・学生ともに向上できる仕組みとして注目される。しかし、指導する院生の質の担保は大きな課題であろう。院生の側に一定程度の日本語表現技術がなければ学生を指導するのは不可能であるだけではなく、むしろマイナスの効果となってしまう。それに対し、詳細なループリックを使用して院生自身の「読む・書く」双方の日本語表現技術を高めておけば、ライティングセンターでも十分に活躍できる技術を身につけることも可能である。

大正大学の「学びの基礎技法B」については、今後ともTAを活用していく予定である。TAとともに添削を行ってきたことで、TA自身の添削力も少し向上してきたと実感することがある。今後TAとの協働を行っていく中で、大正大学においてもライティングセンターを開設できるところまで実現できるとすれば、それは学生・院生・教員・大学それぞれにとって大変理想的な状況である。そうしたことを念頭におきながら、効果的な授業を模索していきたい。

おわりに

学生の日本語文章表現技術の向上は、レポート作成や卒業論文作成の手助けとなるため、大学生活そのものを円滑にするだけではなく、就職活動や社会に出てからも、学生の役に立つものである。そのため、その役割は非常に大きい。それゆえに、学生の文章をよくしていくためには添削を行うか行わないか、どのように行うのか、ピアワークとのバランス

はどのようにするか、など、教員の悩みはつきない。そうした悩みに対する一助として、本稿では、大正大学「学びの基礎技法B」の取り組みによって明らかになった、日本語表現技術の授業におけるループリックの使用の可能性について考察した。

今後とも、効果的な日本語表現技術の授業の構築を目指し、様々な取り組みを行って報告していきたい。

注

- (1) 大正大学では、「学びの基礎技法B」以前にも、日本語表現技術の授業が行われていた。大正大学「学びの基礎技法B」に関しては、2015年3月刊行予定の、『大正大学研究紀要』第100号に、「大学生における日本語文章表現技術の授業展開とその成果」(由井恭子、近藤裕子、春日美穂、日下田岳史)として詳細を述べた。
- (2) ループリックが取り入れられているのは、もちろん大学教育だけではない。中学校での取り組み(大淵 敬史氏 牧野 智彦氏「生徒の帰納的な考え方の思考過程を捉えるループリックの有効性について」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』(37) 2014年7月)や、高等学校での取り組み(辻尚実氏「ループリック作成を通じて理解を深める授業づくり―「広告の形而上学」の授業実践を通じて」『全国大学国語教育学会発表要旨集』(126) 2014年5月)が報告されている。また、沖裕貴氏は、2004年には中学校の92%、小学校の83%で、なんらかの規模でループリックが使用されていることを報告している(「大学におけるループリック評価導入の実際―公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して―」『立命館高等教育研究』(14) 2014年3月)。
- (3) ダネル・スティーブンス氏、アントニア・レビ氏著 佐藤浩章氏監訳 井上敏憲氏、俣野秀典氏訳「ループリックの基礎」(『大学教員のためのループリック評価入門』玉川大学出版部 2014年2頁)
- (4) 注(2)と同じ。
- (5) 「学びの基礎技法B」を担当するのは、大正大学教育開発推進センターに所属する由井恭子氏・近藤裕子氏・齋藤知明氏・高橋若木氏・春日美穂の計5名である。ループリック作成作業は、近藤裕子氏を中心に行われ、教員間の打ち合わせにより改訂されていった。また、大正大学総合IR室の日下田岳史氏にも助言を受けた。
- (6) 小論文は60分800字(質問・披見不可)で、賛否を問う型のテーマで行っている。
- (7) 2014年9月に帝塚山大学で行われた第7回初年次教育学会では、質疑応答のやりとりのなかで、現在の学生が、教員の書く「大人の文字」が読めず、教員の添削が効を奏さない場合があることが話題となった。
- (8) 大島弥生氏・池田玲子氏・大場理恵子氏・加納なおみ氏・高橋淑郎氏・岩田夏穂氏『ピアで学ぶ大学生の日本語表現・プロセス重視のレポート作成』(ひつじ書房 2005年→第二版2014年)をはじめとし、レポートなどの作成にピアワークを取り入れる取り組みが行われている。
- (9) 一方、ピアワークを中心に展開した後期において、論構成など、全体的な部分はよくなってきているものの、前期に改善したはずの、話し言葉の出現のような細かな項目ができなくなってきていることも実感している。それが添削を行わなくなったことによるのか、授業の進度・内容によるのか等、今後分析していきたい。
- (10) TAによるライティングセンターは、早稲田大学、関西学院大学、津田塾大学、愛知淑徳大学などですでに取り組みが行われている。

【資料1】詳細なルーブリック

第3回小論文 チェックリスト

☆…延べ語数
★…異なり語数

学科

コース

学号番号

名前

評価項目	評価項目(詳細)	20点	15点	10点	5点	
1. ☆主語(主節)と述語(述節)は対応している		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～3箇所の文のねじれはあるが、読み手が推測可能である	☐ 4箇所以上の文のねじれがあり、読み手が理解できない	
2. 文体は書き言葉(だ・である)に統一されている		☐ 統一されている	☐ 統一されている	☐ 統一されている	☐ 統一されていない	
3. ☆レポート・小論文にふさわしい書き言葉で書かれている	A 書き言葉・書き言葉的表現で書かれている B 体言止め・倒置法は使われていない	☐ 適切であり、かつ、使い書き言葉で書かれている	☐ 適切である	☐ 1～4箇所の、レポートや小論文に不適切な表現がある	☐ 5～9箇所の、レポートや小論文に不適切な表現がある	☐ 10箇所以上の、レポートや小論文に不適切な表現がある
4. ☆一文の長さは概ね3行以下で、読み手が理解しやすい分量である		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 800字の文章において1箇所の長文がある	☐ 800字の文章において2箇所以上の長文がある	
5. 適切に接続詞を使用している		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 読み手を混乱させるような接続詞の使用がある	
6. ☆修飾語句は内容理解に支障がないよう適切に書かれている(長すぎる・位置が離れている)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～3箇所の、文脈理解を妨げる修飾語句がある	☐ 4箇所以上の、文脈理解を妨げる修飾語句がある	
7. ☆同じ語句や表現は必要以上に繰り返されていない	A 適切に指示詞を使用したり、省略したりしている B 同じような表現を繰り返して使用したり、近接して使用したりしていない	☐ 適切である、または1箇所の繰り返しはある	☐ 適切である	☐ 2～3箇所の繰り返しがある	☐ 4箇所以上の繰り返しがある	
8. ☆語や表現(慣用表現の呼称など)が正しく使用されている		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～3箇所の誤りがある	☐ 4箇所以上の誤りがある	
9. ☆あいまいな表現がみられない(「というような、という、ような、など、くらい」など)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～2箇所以上のあいまいな表現がみられる	☐ 3箇所以上のあいまいな表現がみられる	
10. ☆文中に過不足がなく、文脈理解の助けがない		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 過不足はあるが、読み手が推測可能である	☐ 過不足があり、読み手が推測できない	
11. ☆文法的な誤りがない(助詞、助動詞など)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～4箇所の誤りがある	☐ 5箇所以上の誤りがある	
12. 事実誤認がない		☐ 事実誤認がない	☐ 事実誤認がある	☐ 事実誤認がある	☐ 事実誤認がある	

②表記・原稿用紙の書き方

評価項目	評価項目(詳細)	20点	15点	10点	5点	
13. ☆誤字脱字はない		☐ 誤りがない	☐ 誤りがない	☐ 1～4箇所の誤りがある	☐ 5箇所以上の誤りがある	
14. ☆漢字で書くべき箇所は漢字で書いている(漢字熟語・常用漢字表内字)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～3箇所以上、漢字で書くべきところを漢字で書いている	☐ 4箇所以上、漢字で書くべきところを漢字で書いている	
15. ☆平仮名で書くべき箇所は平仮名で書いている(主に、形式名詞・補助動詞・助動詞など)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～2箇所以上、平仮名で書くべきところを平仮名で書いている	☐ 3箇所以上、平仮名で書くべきところを平仮名で書いている	
16. ☆むやみにカタカナを使用していない		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切ではない	
17. ☆適切に句読点を打っている	A 句読点の使用により、読み手に誤解の解釈をさせ、混乱をきたす B 表記ルールに従って句読点を使用している	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 読み手を混乱させる句読点の使用がない	☐ 適切ではない	
18. ☆記号を適切に用いている(「! ? ,」の使用)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 1～4箇所以上の、表記ルールに従っていない句読点の使用がある	☐ 5箇所以上の、表記ルールに従っていない句読点の使用がある	
19. 原稿用紙の使い方が適切である	A 適切に段落を設けている(一字下げ・段落の設定) B 英数字は1マスに2字書いてある(例外あり)	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切ではない	

③意見文

評価項目	評価項目(詳細)	20点	15点	10点	5点	
20. 論の展開は適当である(序論・本論・結論)		☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 適切ではない	
21. 意見には理由や証拠がある。そして、それらはかみ合っている		☐ 意見を出し出すための理由や証拠が明確である	☐ 意見を出し出すための理由や証拠が明確である	☐ 意見を出し出すための理由や証拠が明確である	☐ 意見を出し出すための理由や証拠が明確でない	
22. 事実や第3者の意見と自分の意見を区別し、客観的に述べている	☐ 事実や第3者の意見と自分の意見を区別し、客観的に述べている	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 事実や第3者の意見と自分の意見を区別し、客観的に述べている	☐ 事実や第3者の意見と自分の意見を区別し、客観的に述べている	
23. 独自の論拠や新しい視点が提示されており、内容が深まっている	☐ 独自の論拠や新しい視点が提示されており、内容が深まっている	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 独自の論拠や新しい視点が提示されており、内容が深まっている	☐ 独自の論拠や新しい視点が提示されており、内容が深まっている	
24. 時間内に規定の字数で論議を書き上げることができる	☐ 規定の字数を満たし、かつ内容もまとまりがある	☐ 適切である	☐ 適切である	☐ 規定の字数の90%を満たしていない	☐ 規定の字数を満たしておらず、また内容もまとまっていない	

【資料2】学生のピアワークに使用したルーブリック

	優秀	標準	もう少し
①構成	序論・本論・結論の構成になり、バランスがとれている	序論・本論・結論があるが、バランスがとれていない	序論・本論・結論になっていない
②文章	長すぎる文章や、意味がよくわからない文章がない	2～3箇所の長すぎる文章や、意味がよくわからない文章がある	多くの長すぎる文章や、意味がよくわからない文章がある
③テーマ	テーマについて明確に論じており、テーマを深めている	テーマから逸脱することなく、論じている	テーマからの逸脱がある
④内容	発展的な内容を含み、テーマについて十分に伝えることのできる小論文になった	内容がまとまり、テーマについて伝わる小論文になった	内容がまとまらず、テーマについて伝わらない小論文になった
⑤原稿用紙の使い方	原稿用紙を正しく使用している (はじめに1マスあける・英数字・句読点など)	原稿用紙の使い方に2～3箇所の誤りがある	原稿用紙の使い方に多くの誤りがある
⑥誤字脱字	誤字脱字がない	2～3箇所の誤字脱字がある。	多くの誤字脱字がある。

【資料3】後期の授業で学生が小論文を書く際に携行したもの（詳細ルーブリックの簡易版）

■表記	☐ 原稿用紙の使い方	☐ はじめ、段落のはじめは1マスあけ ☐ 英数字の表記 (数字・小文字は1マス2文字、大文字は1マス1文字)
	☐ 漢字	☐ 誤字脱字がない ☐ 漢字にすべきところは漢字になっている ☐ ひらがなにすべきところはひらがなになっている(こと、もの、できる等)
■文	☐ 一文の長さ	☐ 長すぎる文章になっていない ☐ 主述の乱れがない
■構成	☐ 序論本論結論になっている	☐ 序論本論結論のバランスがとれている (めやすは序論1：本論8：結論1) ☐ 序論でテーマについて述べている ☐ 序論と結論の内容が一致している
	☐ 客観性	☐ 根拠を示しながら客観的に相手に自分の考えを述べる文章になっている。
■引用	☐ 引用の方法	☐ 直接引用は「」をつけるか、2字下げ(3行程度)で引用してある ☐ 間接引用(自分の言葉でまとめる)した箇所にも出典が書いてある
		☐ 本の引用(筆者『書名』出版社 出版年 頁) ☐ 雑誌の引用(筆者『雑誌名』号数 出版年月) ☐ 新聞の引用(『○○新聞』年月日○刊)
	☐ 出典の方法	☐ サイトの引用(『サイト名』)→ただし本来のレポートはURLと閲覧日の記載が必要、今回の小論文は省略可
	☐ 引用の量・使用法	☐ 引用の量は全体の3分の1以内におさまっている ☐ 資料をまとめただけでなく、資料を使って自分の意見を述べている。

注 ルーブリック作成については、佐藤浩章氏(大阪大学)の助言を基にしている。
出典の記載方法については大枠を確認した上で、学科の指導に従うよう指示している。